

121012 秋の「アサギマダラ」

先日、琵琶湖博物館の屋外展示エリアを“ひらひら”と飛ぶ「アサギマダラ」を見ました。

そして今週、岩湧山頂と滝畑ダムの近くでも、やはり“ひらひら”と飛ぶ同種の個体を見ました。

夏の金剛山頂にはたくさんの個体が花蜜を吸っていましたが、クガイソウの花が散った8月後半でしょうか、その頃からほとんど姿を見ることができなくなっていましたので、ここにきての再会は嬉しかったです。

でも...

今週“再会”したといっても、わずか2匹に過ぎません。

夏の山頂付近にあれほどたくさんいた個体は、いったいどこへ行ってしまったのでしょうか？

アサギマダラは冬の間、暖かな南の島の洞穴などで過ごしています。

また、そこで、休眠せずに越冬した幼虫が羽化して、春から初夏にかけて南から北上、繁殖地となる本州などの標高1000mから2000mほどの涼しい高原地帯にやってくるのです。

ここでは幼虫の食草である「イケマ」や「オオカモメヅル」に産卵し、そこから成長して羽化する子ども世代とともに大きな集団を作るようです。

これが夏の金剛山頂で、たくさんの個体を見ることができた理由なのですね。

やがて秋になり、気温の低下とともに暖かな生活地を求めて南方へ移動を開始し、遠く九州や沖縄、さらには八重山諸島や台湾にまで、はるばる海を越えて飛んでいきます。

このように、「アサギマダラ」は季節により長距離移動（渡り）をする、我が国で唯一のチョウチョなのです。

多くのチョウは、羽化後10日くらいしか生きることができないのですが、この種の成虫生存期間は数ヶ月に及ぶことから、長距離の移動が可能なのです。

また、「ヒヨドリバナ類」や「アザミ類」の花を好みますので、吸蜜植物が豊富なことも生存には不可欠であり、別添の写真の個体はアザミの花で吸蜜中です。

高標高地から低地に降りてくると「センダングサ類」や「ツワブキ類」の花を好むようで、秋季に南へ移動する個体は、これらの花で盛んに吸蜜して、エネルギーを蓄えるそうです。





